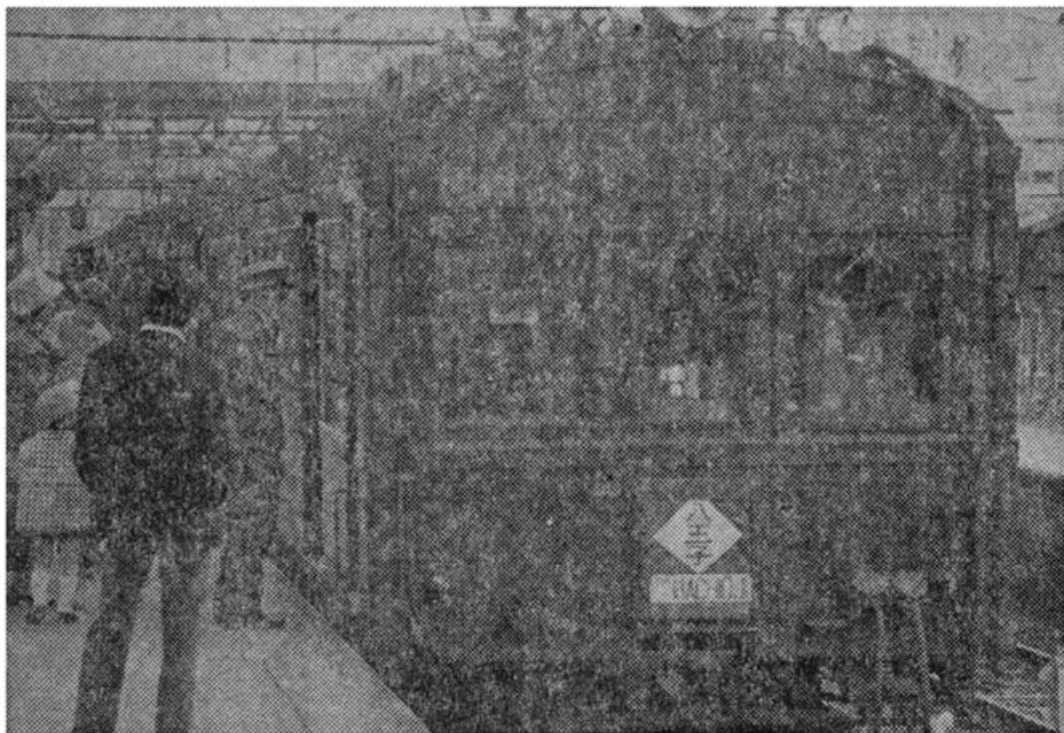


# 線 横 浜 鉄 道 国 口 波 ン

## 乗客苦難の冬の陣



写真真実 乗客無視と評判の悪い  
国鉄横浜線

ストーブの恋しい季節になったが、国鉄横浜線の乗客にとって、冬の通勤、通学は文字通り「試練」の連続。走行中は車体が古くスキマ風に悩まされるし、単線運転のため、ホームでスレ違いの待ち時間中、あけ放したドアから寒風がモロに吹き込んでくる。おまけに、ヒーターのキキが悪いという「三重苦」。国鉄では五十年をメドに、複線化する方針だけは決めたが、車両の近代化は予定にないという。「寒くて、おそくて、すぐ止まる、乗客無視の横浜線」という利用者の声は当分は静まりそうもない。

### 寒く…モタモタ 近代化いつの日

現在、同線に使われているのは計九十四両。三段窓七二型(モーター付き)と七三型(同、運転台付き)、二段窓の七八型(モーターなし)と七九型(同、運転台付き)の四型式があるが、いずれも、昭和初期に基本設計され、終戦後、一部が改良されて生き残ったもので、二十九年―三十年ごろに作られた老朽車両。さる二十六年四月、桜木町駅で乗客百六人の死者を出した「桜木町事件」当時の「六三型」の窓枠や連絡通路などを改造したものだ。

このため、窓やドアの建て付けにガタがきており、スキマ風がビュビュ音を立てて吹き込んでくる。真冬には、窓ぎわは寒いため、腰掛ける人がめっきり少なくなるという珍現象も起きるほど。それでも走っているうちはまだまし。単線運転のため、本数が少なく、待ち時間が長いうえ、やっと乗っても東神奈川から八王子の間で、二、三回はホームでスレ違いがあり、そのたびに三―五分間もドアがあけっぱなしになる。「ちょっと暖かくなっただかと思

うと、すぐ外の寒さに逆もどり」と乗客の横浜市緑区鴨居町鳥森、会社員Aさん(三三)は不満をぶちまける。ドアが完全にしまらなくなることもある。ドア引き込み口のスキマが広いので、泥道を歩いてきた乗客のクツの小石などがつまってしまう。駅員が、からだを張って、ドア代わりをつとめるが、もちろん走行中には寒風がそれこそモーターに吹き込んでくる。ヒーターを強くすれば多少は解消―と思うのだが、できない事情がある。もともと十六個の座席全部にヒーターを入れるはずだったのを、設計途中で「全部入っては熱すぎる」と半分の八個にした。それに、新型と違い、車両が発電機がない。

解決策は、複線化を早めることと新型車両の導入だが、国鉄は「当分新型を優先決定はありません。旧車両を補修させる路線と、新型車に余りがあれば……」と冷たい。